http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.187　13/04/16

遅刻を考える

担任をしていると、「なぜ遅刻してはダメなんですか？　誰にも迷惑かけないし、いいじゃないですか？」みたいなことを言う生徒がいる。私の答えは簡単で、「自分で考えなさい！」である。

そもそもこのような質問自体、甘えていると私は思う。君たちは頭がイイせいか、自分の気にくわないことがあると、それを論理的に考えたふりをしがちだ。そして、何事にも突っ込みどころはあるものだから、本当ならそんなところ突っ込んでも仕方ない、つまり本質的でない突っ込みどころを見つけて、自分の理路の正しさが証明されたように思いがちなのである。だから私は、そういう諸君に対して、自分とは反対の立場の考え方の根拠についても、しっかり自分で考えてごらんと促すわけだ。他の頭がイイ人から見れば、諸君の論理にだって、突っ込みどころがいっぱいあるに違いないからである。

＊

さて、遅刻の話。遅刻が許されない理由はしっかりと自分で考えてほしいが、そのヒントは与えておこう。

社会学の方面でそれなりに有名な本として『遅刻の誕生』（三元社、2001）がある。「誕生」とあるのだから、もともと「遅刻」などという概念はなかったのである。遅刻は資本主義の発展や国民国家誕生とともに生まれた概念で、だいいち「時計」が社会に広まらない限り話題になるはずがない。幕末から明治にかけて、外国からたくさんの外国人教師が日本にやってきて日本の近代化を支えたが、彼らは日本人の時間に対するルーズさにほとほとあきれたという。今ではちょっと信じられないような話だが、このように「遅刻」というものは、人間にとって本質的・普遍的な概念なのではなく、人為的に作られた価値基準の一つに過ぎないのである。

「なぁんだ、じゃぁ遅刻なんて大したことないじゃん…」と早合点してはいけない。作られた概念でありながら、それがいわゆる先進国で標準的な道徳となっていることの重みを考えるべきなのである。「丸坊主にする」などという校則が駆逐された中で、遅刻はどの学校の指導でも大切にされている。いや、学校だけではない。学校で遅刻すればせいぜい指導される程度であろうが、社会に出て遅刻しているようでは、この日本では良識（常識ではない！）のない人間として遇されることになる。現在の我々の社会・日常生活の一端が、遅刻概念によって支えられ、成り立っていることを想像すべきである。

もう一つ、君たちがよくいう「誰にも迷惑をかけていない」いうことについて。私にいわせると、それこそ想像力の欠如そのものなのである。自分は自分一人だけで生活している・生きていると思っているのだろうか。自分の遅刻に関わっている人間は、本当に自分一人だけなのか、もう一度、素直に考えてみほしい。

現状から逃れるために頭を使って本質からはずれた理屈をこねるのではなく、素直に日比谷の学生としてすべきことに向き合い、その達成を目指して頭を使うべきだろう。